

2012年9月発行

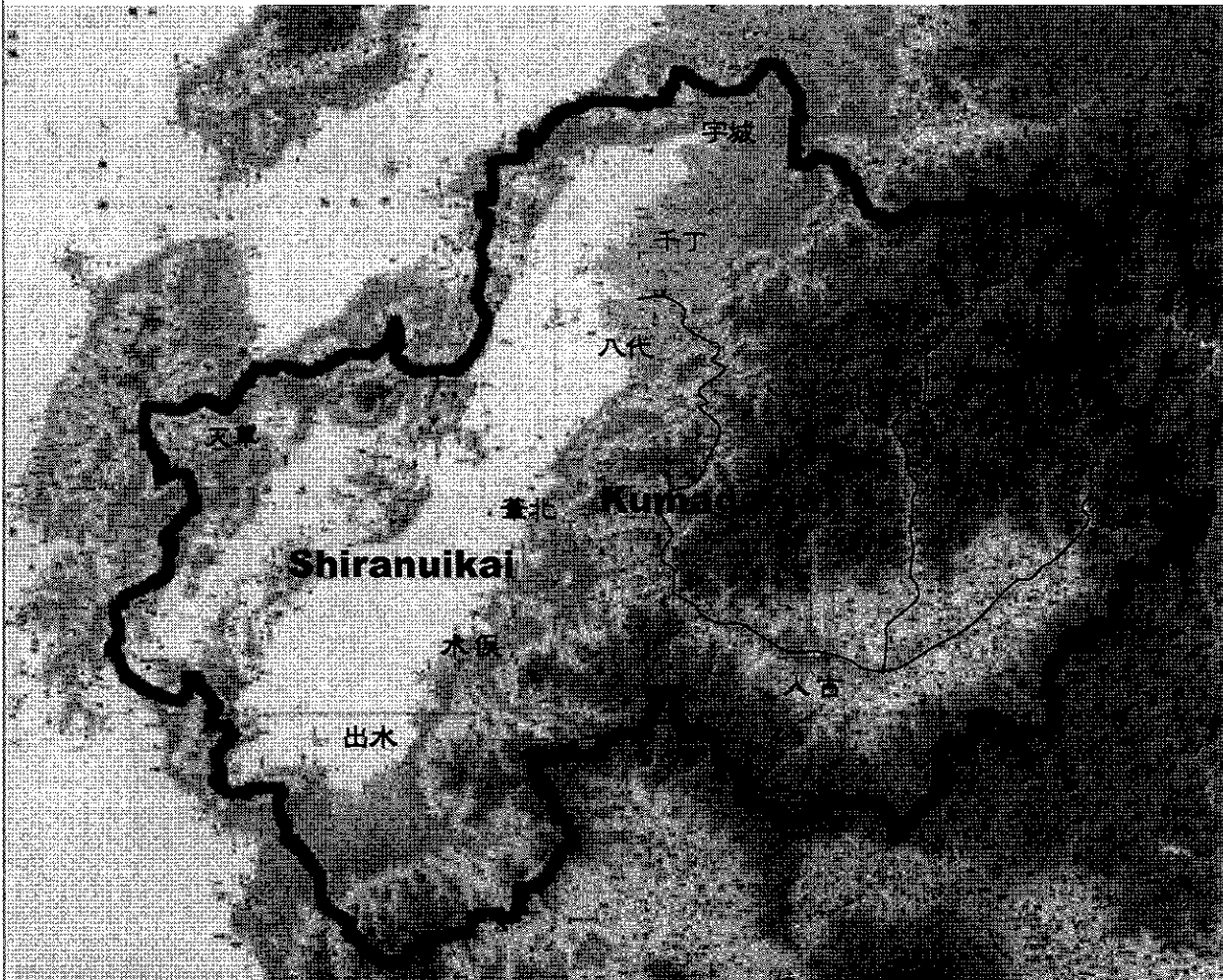
不知火海・球磨川流域圏学会ニュースレター

# らぬいま

第13号

内容

- 平成24年度総会報告
- 研究発表会報告
- 現地見学会報告
- 荒瀬ダム撤去工事始まる
- 球磨川流域住民の生活様式と荒瀬ダム建設
- 紹介：流域圏の本『出水の川と生活の歴史』
- 追悼：原田正純先生を偲んで
- 八代海沿岸の地名①立神
- 学会誌 原稿募集
- 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売
- 現地見学会案内 10月21日(日)  
水俣川流域の自然と文化財



TEL&FAX: **0964-26-2003**

事務局

熊本県熊本市南区城南町東阿高 1136-6

# 平成 24 年度総会・研究発表会報告

日時：平成24年6月2日（土）午後12時30分

会場：氷川町文化センター

第6回目の総会は、八代郡氷川町での開催となりました。総会の会場は町の中心部や最寄りの駅から少し離れたところにあり、会員の皆様にはご不便をお掛けしました。以下の議事次第に従って、事業内容・会計報告が行われました。会員減と会費回収率の低下により、本年度の予算は緊縮財政となっています。

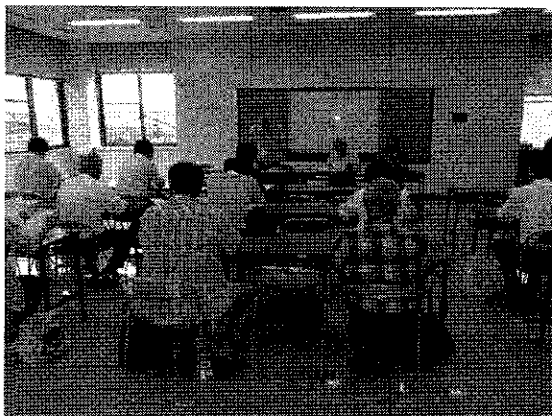
また、新しい事業への提案があり、本年度にその具体的構想をまとめ、来年度総会に提案されることとなりました。以下、報告です。

## ◆総会式次第 出席者：33名（出席21名＋委任状12名）

- 1) 開会
- 2) 会長挨拶
- 3) 議事
  1. 議長選出
  2. 平成23年度事業報告
  3. 平成23年度会計報告
  4. 会計監査報告
  5. 役員改正
  6. 新会長挨拶
  7. 平成24年度事業計画案提案
  8. 平成24年度予算案提案
  9. 質疑
- 4) 閉会
- 5) 諸連絡

## ◆平成23年度事業報告

- ① 平成23年度総会開催 6月11日（土） やつしろハーモニーホール 中会議室
- ② 研究発表会 6月11日（土） やつしろハーモニーホール 大会議室
- ③ 現地見学会1 6月12日（日） 「荒瀬ダムから球磨川河口まで」
- ④ 現地見学会2 9月25日（日） 「芦北町古石地区の歴史と自然に学ぶ」
- ⑤ ニュースレター発行 年2回（9月及び3月）
- ⑥ 学会誌発行 平成24年4月末日
- ⑦ 理事会開催 8回／年H23：8月5日、10月7日、11月25日  
H24：1月20日、3月15日、4月13日、5月18日、5月27日
- ⑧ ホームページの充実
- ⑨ 会員拡大 目標 130名



↑総会の様子



↑平成23年度第1回現地見学会：雨の中の干潟観察

## ◆平成 23 年度決算報告

### (収入の部)

名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3000円 * 78 名	235,000	総会時 28 名、振込 50 名
団体会費	10000円*3	0	
繰越金		12,143	
雑収入	学会誌・PDF 販売等	7,300	
	発表会参加費	56,000	
	懇親会余剰金	11,121	
	利息	9	
借入	借り入れ	250,000	
計		571,573	

### (支出の部)

名 目	内 容	金 額	備 考
郵便代	送料・ハガキ	36,179	
学会誌作成費	編集・印刷	289,130	150 部
ニューズレター作成	2回/年	56,700	
事務経費		23,960	コピーチラシ、印刷経費等・印字
HP維持費		10,000	
会場費	役員会会場費	17,960	総会・発表会会場費含
雑費		20,000	講師謝礼
前年度借入金返済		99,570	
繰越		18,074	
計		571,573	

監査 沢畑亨

監査 歌岡宏信

## ◆平成 24 年度事業計画

- ① 平成 24 年度大会 (総会・研究発表会) 6 月 2 日 氷川町文化センター
- ② 現地見学会 1 6 月 3 日 「氷川町の歴史と自然に学ぶ」
- ③ 現地見学会 2 10 月 21 日 「水俣川流域の歴史と自然に学ぶ」
- ④ ニューズレター発行 年 2 回 ( 9 月及び 3 月 )
- ⑤ 学会誌発行 平成 25 年 4 月末日
- ⑥ 理事会開催 6 回/年
- ⑦ ホームページの充実
- ⑧ 会員拡大 目標 130 名

不知火海・球磨川流域圏学会ホームページ : <http://www.shiranuikuma.org/>

### ◆平成24年度予算

#### (収入の部)

名目	内容	金額	備考
個人会費	3000円 * 93名	279,000	
団体会費	10000円*2	20,000	
繰越金		18,074	
雑収入	学会誌・PDF販売等	20,000	
	発表会参加費 寄付金	70,000	
	会費未納金回収	50,000	未収金の約50%回収
計		457,074	

#### (支出の部)

名目	内容	金額	備考
郵便代	[(140*2)+50]*110名	36,300	
学会誌作成費	編集・印刷	40,000	PDFで作成
ニュースレター作成	2回/年	60,000	
事務経費		40,000	コピー、印刷経費等
HP維持費		5,000	
会場費	役員会会場費	20,000	総会・発表会会場費含
雑費	講師謝礼	10,000	
前年度借入金返済		250,000	
予備費		5,774	
計		457,074	

※会員減と会費納入者減のため、23年度は赤字運営となり、本年度は学会誌の発行方法を変更します。

※前年度の借入金返済を優先して学会誌をPDF作成とする事が決まりました。

※予算内で学会誌の製本化を作成する事が出来る方法を模索しています。

### ◆その他

#### 来年度の新事業「残したい水ものがたり (仮称)」認定事業について

来年度の事業計画として承認されたのは上記内容ですが、新事業として、流域圏内における将来に残したい水辺を不知火海・球磨川流域圏学会として認定・発表する「(仮称)残したい水ものがたり」認定事業が出来ないかという提案があり、企画チーム「(仮称)残したい水ものがたりワーキンググループ」を設立、具体案の構想を進め、企画案を作成、来年度からの事業として提案することになりました。

今後、企画の名称、企画の趣旨や目的、水辺の定義、選定の基準、剪定の方法、公表方法等について、ワーキンググループで案を作成し、役員会に報告・意見をいただきながら、事業案を作成する予定です。

【お知らせ】会計の報告にあるように、本年度の学会誌発行方法は未定ですが、原稿の募集は例年通り行います。どうぞよろしくお願ひします。⇒ 学会誌原稿募集要領 13ページをご参照下さい。

# 研究発表会報告

日時：平成24年6月2日（土）午後 時

会場：氷川町文化センター 後援：八代市、八代市教育委員会

会員7名による口頭発表と3名のポスター発表があり、盛會に終わりました。発表の内容詳細につきましては、学会誌に掲載予定です。

《研究発表会》 参加費（会員 500 円、一般 1000 円）

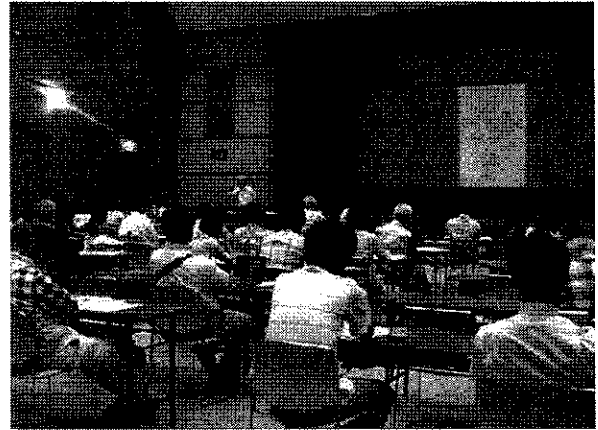
日時：6月2日（土） 14：00

ポスター発表は 13：00～

会場：氷川町文化センター 1階ホール

主催：不知火海・球磨川流域圏学会

後援：氷川町教育委員会



## プログラム：

13:30 受付

14:00 開会

14:05 基調講演 「種山石工の活動」

上塚尚孝氏（「石匠館」館長）

15:00 研究発表（口頭発表）

(1) 氷川町の歴史と自然

今田治代（氷川町教育委員会生涯学習課主幹）

(2) 氷川河口の野鳥たち

高野茂樹（日本野鳥の会熊本県支部長）

(3) 熊本県における竹林の現状、課題および対策

井上昭夫（熊本県立大学環境共生学部准教授）

(4) 今後の八代海の植物プランクトン研究に向けて

一宮睦雄（熊本県立大学環境共生学部講師）

(5) 山の川の水質はどのようにして決まるのか

高木正博（宮崎大学農学部准教授）

(6) 八代干拓地の塩害と対策

深田正博（八代地域振興局）

(7) アサリ資源回復のための海底耕耘技術の開発

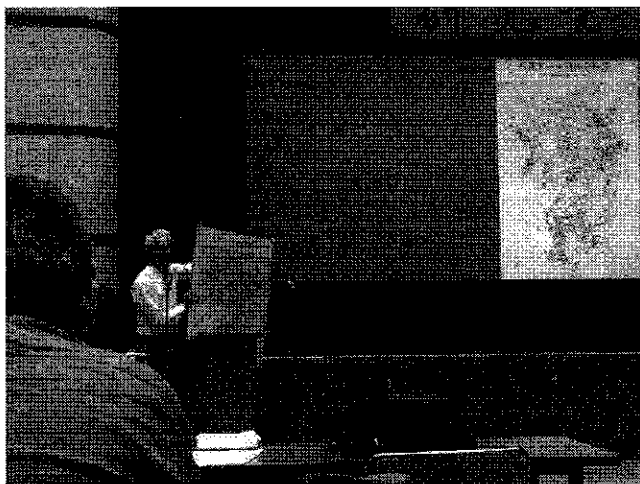
原口浩一（熊本県立大学環境共生学部助手）

※13：00～ ポスター発表

(1) 「ヒメボタルの移植について」 森山聡之（福岡工業大学社会環境学部教授）

(2) その他

## 《 研究発表会の様子 》



基調講演



ポスター発表

熊本県内には大河、一級河川が 4 本あり、阿蘇の山塊と九州中央山地に端を發し、いずれも西走し内海に山の幸を届けています。北から菊池川、白川、緑川が有明海に、球磨川が八代海（不知火海）に。大河というには少々憚れるが、長さ 30.7km、流域面積 148.6 km<sup>2</sup>を持つ氷川という二級河川があり、熊本市から九州自動車道を南下、急降下道にかかる氷川橋を過ぎると宮原 SA になる。氷川は八代市泉町と美里町との境界に聳える標高 1073m の白山南面、釈迦院谷として源を發し、南流、岩奥川が合流するあたりで氷川に名を変え、西に流れを変え、さらに、栗木川が合流し、氷川となり、八代市泉町の中心部を流れ、氷川ダム（肥後平家湖）で堰き止められ西走。一方、大通峠に水源をもち、八代市東陽町を南西走してきた河俣川と合流、八代郡氷川町に入るや、高さ 75m、幅 250m の白い絶壁と緑に包まれた「肥後の赤壁」と呼ばれる景勝地・立神峡（たてがみきょう）を形成し、広大な干拓地・八代平野北部をゆったりと流れ、氷川町若洲付近で不知火海に注がれます。

不知火海・球磨川流域圏学会、平成 24 年度研究発表会は 2005 年 10 月 1 日に八代郡竜北町と宮原町が合併し、發足した氷川町の町民センターで開催され、石匠館・上塚尚孝館長による基調講演「種山石工の活動」、氷川町教育委員会・今田治代氏による「氷川町の歴史と自然」、日本野鳥の会・高野茂樹熊本支部長による「氷川河口の野鳥たち」という口頭発表を受けて、学会二日目に開催される恒例の現地見学会として企画されました。

9:20、八代ハーモニーホール駐車場集合、9:52、肥後細川藩、永青文庫所蔵『領内名勝図鑑』—八代郡種山手永之内—として描かれ、県立自然公園・くまもと百景・立神峡到着。暮らしを潤す豊かな水は、古くから人々の信仰とともにあり、立神峡には上宮・中宮・下宮の三社が祀られ、まず、景行天皇 13 年 8 月（743 年）創建、下宮・立神熊野座神社を見学後、平成 5 年 3 月に竣工なった吊り橋・火の国橋を参加者一同横断、緑に包まれた絶壁とゆるやかに流れる氷川の緑色なす川面の美しさを堪能しました。この付近の歴史に詳しい佐藤伸二事務局長さんの説明で散策しました。立神の由来は、岩壁の洞窟を穴洞（あなんどう）と呼び、「タチガミさん」と呼び名して立神（竜神）の集落名になりました。五つ穴横穴群・岩立横穴群からは紀元前 1 万年前の旧石器時代の石器類が出土しています。吊り橋上部へと続く山道には微笑ましい尊顔を投げかける五百羅漢の石仏群が立ち並び、極彩色の朱色に彩られた中宮の不動明王が鎮座する御堂がありました。その先には「タチガミサン」と呼ばれ崇められてきた石筍が鎮座する穴洞・上宮があるのですが、そこまでは足を運ばませんでした。

研究発表会で、私は氷川の由来について今田治代氏に質問をしてわかったことなのですが、氷川という名称の経緯です。氷川はかつて「火川」と呼ばれ、熊本といえば「火の国」となっていますが、火の国の由来は、実に、この火川にあり、旧・宮原町が「火の国發祥の地」となるのだそうです。熊本在住 29 年目を迎えているのですが、立神峡を訪れたのも初めて、やはり、知らないことだらけなのです。

立神峡から約 2km、八代市東陽町、石匠館へ。上塚尚孝館長さんから詳細な解説があり、館内を見学しました。江戸末期から明治・大正にかけて、驚くべき土木・建築技術を持ち、全国にその名をとどろかせた「種山石工」、この石工集団を率いる棟梁の中に、名工として名高い三人の人物がいました。1634 年、



長崎中島川に日本初の石橋「目鑑橋」架橋。時代は下って、18世紀半ば、種山石工の祖、長崎奉行所役人・藤原林七（1765年生まれ）はオランダ人に石橋の技術を学び、1787年、長崎から種山村に逃亡し、石工の技術を習得、藩内に石橋建造開始。19世紀に入り、土木事業全般に優れた技術を持ち、神業とまで言われた、岩永三五郎（1793-1852）が各地で活躍、明治6~7年明治政府に呼ばれ東京に万世橋を架けた橋本勘五郎（1822-1897）は、1846年、宇助とともに重要文化財・砥用・霊台橋、1852~1854年、宇市とともに矢部の重文・水路橋・通潤橋を架けました。種山石工成立の要因は、技術と人のみならず、その地に、石材として最適な熔結凝灰岩があったことがあげられます。石匠館は種山石工が築きあげた石橋文化をイメージした石の建造物であり、館内外が美術品の様でした。近辺には橋本勘五郎の豪邸があります。

昼食は、東陽町・菜摘館でいただきました。河俣川上流域にあるショウガが栽培される棚田と石橋を目指しました。ショウガ畑では草丈が10~30cmの若芽が生長しており、イグサが敷かれていました。最上流にかけられた嘉永元年竣工の鹿路橋（市指定文化財）、笠松橋、谷川橋を渡り河股阿蘇神社、大正6年頃竣工、美生橋を見学、河股川・川辺広場で足を濯ぎ、大和田会長の挨拶後、現地で解散しました。

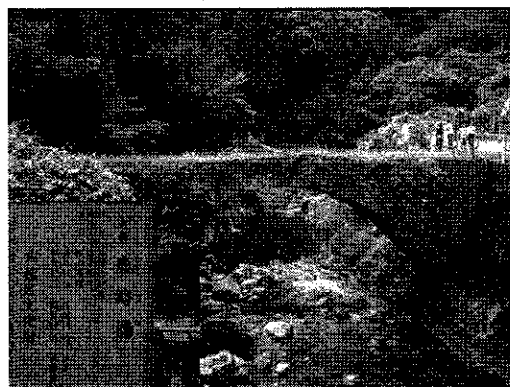
今回の見学会は、30年余り、自然農法稲作と有機栽培に係ってきた者としてこれまで馴染みの少なかった「氷川流域の自然と歴史に学ぶ」でした。農水省統計によれば、ショウガ栽培一作に使われる化学肥料投入分量は10a当たり窒素28.7kg（稲の3.7倍、以下同様）、リン酸27.7kg（2.6倍）、カリ28.4kg（3.3倍）、合計84.9kg（3.1倍）、99作物中第18位、一方、農薬分量は10a当たり殺虫剤28.8kg（288倍）、殺菌剤は0.6kg（3倍）、除草剤は0.1kg（50%）、その他は0（稲は0.1kg）、合計29.5kg（49倍）、39.9kg（66.5倍）のコンニャクに次いで99作物中第2位の使用量で、多肥多農薬の典型です。畑の脇には土壤燻蒸剤・臭化メチルの空き缶が何本も投げ捨てられていました。ショウガと自然環境、石橋の下をゆるやかに流れ落ちる清流に未来はあるのかなと考えながらの一日でした。



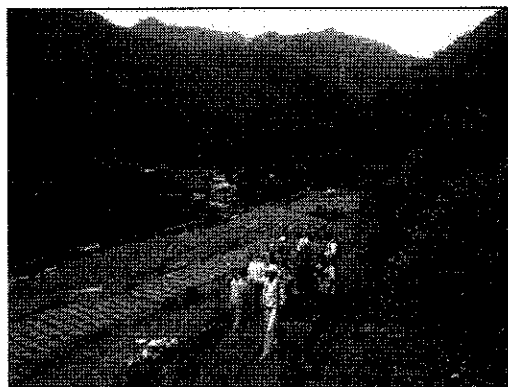
石匠館で



立神峡・火の国橋を渡る



河股川最上流に架橋・鹿路橋で



ショウガ栽培棚田で

## 荒瀬ダム撤去工事始まる

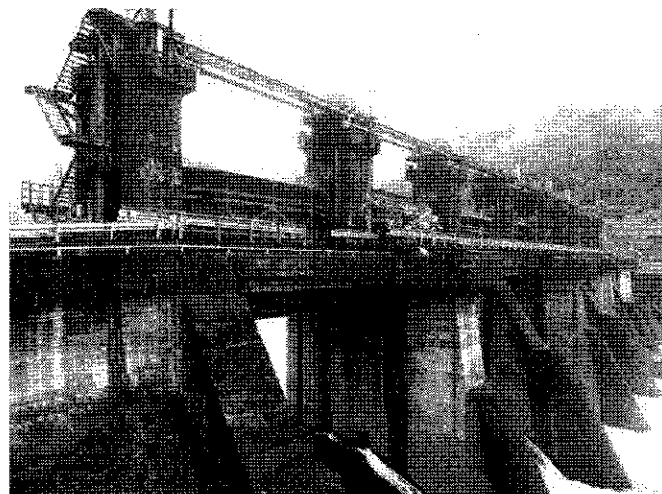
### 荒瀬ダム撤去を球磨川再生の機に

つる 詳子

熊本県営荒瀬ダム（八代市坂本町）の撤去工事が9月1日に開始された。平成14年に撤去が決定されてから、10年が経過した。この10年間に撤去から存続へ、そして再び撤去へと二転三転したものの、10年の間に撤去工法の決定、堆積した土砂除去作業、護岸の補修工事、水利権の期限終了に伴うゲート全開など撤去への準備は進められてきた。この間に河川や干潟の状況はかなり変化を見せている。今後本格的な撤去作業により、球磨川や河口干潟がどう変わっていくのか、興味深い。全国の大学や研究者なども徐々に現場に入り始めているが、ここでの事例は、今後ここに続く撤去の現場だけでなく、河川構造物と河川や海に与える様々な影響を検証するのに貴重なデータが得られる機会となるはずである。

河川の物理的・生物学的視点だけでなく、社会的、経済的な視点でも見ていく必要がある。何より、地元の願いは、昔のようにアユやウナギが捕り尽くせないほど豊富にいたころの球磨川を取り戻したいということである。そして、その願いが実現させるためには、上流の瀬戸石ダムや下流の遥拝堰が大きな問題の一つであることを地元は認識している。

今回の荒瀬ダム撤去は壮大な実験というコメントもよく耳にするが、荒瀬ダム撤去を球磨川の再生として捉え、撤去をきっかけにして、球磨川の多様性を如何に取り戻すかに、撤去で得られたデータを生かし、球磨川の再生のために次の具体的なステップに進んでこそ、壮大な実験といえるのではないだろうか。熊本県・国・研究者はここで住民とともに流域圏の再生のために、壮大な取り組みを始めてほしいものである。



※荒瀬ダム撤去に関する経過や球磨川・不知火海の変化に関する情報は下記 facebook ページで知ることができます。Arase Dam Removal and Kuma River【日本発！荒瀬ダム撤去】

<https://www.facebook.com/arasedam>

★ニュースレターの  
原稿、随時募集中し  
ています

学会では、1年に2回、ニュースレターを発行しています。地域の問題やお知らせ、個人の活動報告や提案などなんでも結構ですので、積極的にご投稿下さい。  
送り先：FAX0965-32-7140、E-mail:crane938@yahoo.co.jp



# 「球磨川流域住民の生活様式と荒瀬ダム建設（旧坂本村の場合）」

上村 隆一

## はじめに

平成17年8月1日、旧坂本村は、旧八代市、千丁町、鏡町、東陽村、鏡村と合併し、「八代市坂本町」になった。いわゆる「平成の大合併」である。合併により、坂本村は八代市の一部に組み入れられることにより独自性を次第にうしなっていくが、これについては、別の機会に触れる。ここでは、荒瀬ダムの撤去工事が始まったことを受けて、荒瀬ダムのある旧坂本村の流域住民の生活様式・価値意識をダム建設時にしぼって大枠を整理しておきたい。つまり、荒瀬ダムはなぜ流域住民によって受容されたのかという問題である。撤去工事開始時に、そうした、いわば過去の問題をとりあつかうことには理由がある。それは、荒瀬ダムはなぜ撤去されることになったのか、撤去後の球磨川と流域住民との関係はどうなっていくのかを考えるうえでの前提作業にほかならないからである。

## 「流れをとめる」

熊本県営荒瀬ダムは、昭和28年2月10日に着工し、昭和30年3月31日に竣工した。竣工の前年12月25日には藤本発電所が発電を開始しており、実際には、1年10ヶ月の短期間にダムは完成している。この荒瀬ダム建設について、『坂本村史』（平成2年12月12月25日）796頁は、次のように述べている。

「悠久幾千年の歴史を秘めた大河球磨川は、今や荒瀬の建設によってその流れを止めた。県では、『県民による県民のための県民の電力』を生み出すために、まずテストケースとして、当時最も調査の進んでいた荒瀬地点にダムを建設し、藤本に発電所を建設することにした。」

『坂本村史』は、荒瀬ダムにより、「大河球磨川はその流れを止めた」と書く。そのとおりである。荒瀬ダムは球磨川の流れを止めたのである。しかし、「流れを止める」ことの意味は、ダム建設時には、それほど重要なものとは認識されていなかった。鮎をはじめとする魚族の遡上などができなくなることは、もちろん、予期されていた。しかし、予期されていたのはそれだけであった。しかも、補償金で解決できる問題として位置づけられていたフシがある。それは、旧坂本住民の生活が球磨川との関連性をすでに薄めていたことを意味する。分析的にいえば、こうである。

## 流域住民の賃労働者化

第一に、当時、流域住民の賃労働者化が進み、球磨川に関連する仕事の比重は著しく低下し、鮎漁などに専念する川漁師の人員数は微少化していた。たとえば、ダム竣工時の統計をみれば、「漁業・水産養殖業」に従事する者の数は43名であるのに対して、賃労働者は2千人を超えている。そのうちの多くは、おそらく、旧坂本村内の十条製紙工場およびその関連事業所の労働者であったであろうと考えてよいであろう。年輩の話聞くかぎりでは、漁労は、当時あっては、高齢者と女性を中心とした補助的な作業、あるいは、賃労働者の副業の色彩の強いものに変化していたと要約できるように思われる。これにかかわって、鮎漁などにより球磨川流域の住民の生活は、他地域に比べて豊かであったと指摘されることがあり、それは必ずしも不正確ではないが、全体的傾向としては、漁労生活の衰退は明白であった。それは、生業としての漁労から、副業としての漁労への質的転換であり、この質的転換は、ダム建設によって、さらに、レジャーとしての「釣り」にいたることになる。付言すると、水没家屋に対する補償基準は高めに設定されている。その理由として、熊本県は、旧坂本村は工場労働者が多く、その賃金水準を考えるならば、都会的基準を補償基準にするのが妥当であると説明している点に留意しておきたい。

## 舟運の衰退

次に、球磨川を利用して人員・貨物を輸送すること、すなわち舟運も衰退していた。舟運は長い間にわたり旧坂本村の基幹産業のひとつであった。人吉球磨の相良家の八代支配を通じて、人吉球磨と旧坂本とは親

和関係を形成していた（人吉相良の一向宗禁令という例外はあったが、禁令はさほど厳格でなかったと推測する）。庄屋も八代支配時代の後裔の相良の旧下士があたり、相良藩主が球磨川をくだるさいには、紋付袴で藩主をでむかえていた。八代松井家がそれを許容していたことはいまでもない。そうした事情も重なり、球磨川の旧坂本の川舟は、「他領舟」と位置づけられつつも、人吉球磨の荷を八代まで運び（下り舟）、あるいは、八代から人吉球磨に輸送した（上り舟）。八代には相良の仮屋が置かれ、仮屋を中心にして人吉球磨の産物は全国に流通された。

しかしながら、舟運は、明治期の鉄道建設によって衰退を決定的に宿命づけられることになる。鉄道の敷設は明治政府の基本方針であり、交通関係を根本的に改める近代化のシンボリック事業であった。明治24年4月1日に、博多―千歳川（久留米付近）に九州ではじめて汽車が走った。その後、熊本に南下し、明治29年11月21日に八代駅まで開通した。八代から鹿児島までの鉄道の敷設については、水俣・川内を通る海岸線案（海線）と人吉・吉松を通る山間部線（山線）の2案があった。両案をめぐって激しい誘致合戦がくりひろげられた。結論として、山線案が採用された。海線は艦砲射撃を受けやすく危険であるとの軍部の判断によるものであった。明治43年11月21日に全面開通し、「鹿児島本線」と名付けられた。それより先、明治41年6月1日に、八代―人吉間は開通していた（この間、海線も少しずつ敷設されて、昭和2年10月17日に全面開通するにいたり、それまでの「肥薩線」から「鹿児島線本線」に、また山線は「鹿児島本線」から「肥薩線」に、それぞれ改称された）。

八代―人吉間の鉄道の開設により、球磨川の舟運は急激に減少した。開通前の明治33年の統計によれば、旧坂本村では2000艘前後の川舟があったと推測されるが、荒瀬ダム建設当時は、ほとんど姿を消していた。ちなみに、明治43年の「観光球磨川下り」の開始は、鉄道開通をうけての、川舟業者の苦肉の対応であると指摘されている。

### 流筏

もちろん、すべてが一度に変化したわけではない。特に、筏を利用した木材の搬出は、木材特需を背景に、荒瀬ダム建設前後を通じて、さかんに行なわれた。山林の財産的価値を重視する傾向は少なくとも昭和40年代半ばまで継続している。しかし、ここで注意しなければならないのは、木材搬出は、基本的に、山林所有者の利益と支配のもとにあった点である。山林所有者は、木材を搬出できればよく、筏は単なる搬出手段にすぎなかった。鉄道とならんで、球磨川流域の道路が整備されるならば、木材は搬出できる。事実、荒瀬ダム、瀬戸石ダムの建設にあわせて流域沿岸に道路がつくられる。現在の国道219号線である。道路の整備は自動車社会の到来とも適合的であった。

他方、筏師はダム建設によって職を失うことになった。そのために、筏師は最後まで荒瀬ダム建設に抵抗した。しかし、その抵抗は強いものではなかった。筏師は、山林所収者の下請的位置にあり、正規の職としては強く意識されていなかった。賃金労働の職がみつければ、筏師は、賃労働者化した。賃金労働者は「ヒュトリ」と呼ばれた。高齢者は、現在でも、賃金労働者をそう呼ぶ（「ヒュトリ」は日雇が訛った言葉であるが、旧坂本村では、賃金労働者全体を指す）。

### 流域住民の精神的エートス

要するに、荒瀬ダム建設当時、少なくとも成人男性に関するかぎり、職業として、球磨川との接点は希薄になっていた。それが、荒瀬ダム建設時の物的（経済的）土台である。そして、この物的土台が荒瀬ダムの建設つまり発電事業を流域住民が受容するうえで効果的に作用した。工場労働者化した流域住民にとり、電力の重要性は容易に理解できる内容であった。工場で働く者にとって、電力不足が工場の操業停止につながることは自明のものであった。つまり、流域に住むことが直ちに流域住民らしい精神文化に身につけることなくならず、むしろ、工場労働者としての精神で荒瀬ダム建設は捉えられることになる。それは、現在でも同様であって、人は、川との接点なしには、川のもつ意味は理解できない。そういう人にとって、流域は住居の

場所を指すだけの存在にすぎないし、それで十分である。流域の環境は住居の生活環境と同一にとどまる。

熊本県（事業主）が、旧坂本村の住民に対し多様な利益誘導の宣伝をくりかえし実施したことは周知のとおりである。第二次世界大戦中に形成された国家・県への忠誠意識の存在も指摘されている。「御上のいうことには逆らえない」という意識である。時代状況を考えるならば、「国のために、熊本県のために」は確かに琴線に触れるスロガンであったろう。

ダムができれば、観光客が来る、水害はなくなる、鮎やウナギは放流する、桜の木を植える、などなどの利益誘導に加えて、「国のため、熊本県のため」という大義がかかげられたのである。しかし、こうした利益誘導や大義論だけでは、荒瀬ダム建設時の流域住民の精神的エトスは説明できないと考える。球磨川との接点が希薄になり、工場労働者の思考様式が支配的になりつつあった点を無視できないと思うのである。

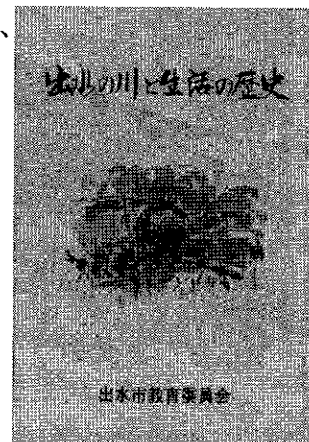
## むすび

歴史は皮肉にみちている。球磨川との職業的接点が希薄になった世代の人々が、その後、荒瀬ダム撤去運動の主演になったのである。なぜ、そうなったのか。さらに、球磨川との接点がいつそう希薄な世代はどのようにして球磨川の再生にかかわっていきけるのか。それを整理する作業が次の課題になる。「球磨川の再生」というとき、鮎、カニ、ホタルなど失われたものの復活、干潟や海の豊饒化などに目がいきやすい。むしろ、その射程には、人間の社会のあり方も含まれているのであろう。しかし、私は、その人間社会を直接に取りあげたいと考えている。荒瀬ダムのある荒瀬部落に生まれ育った者としての私にとっては、それが最大の関心事である。ひらたくいえば、祖父や祖母、父や母、伯父や伯母などは、荒瀬ダム建設時になにを考えていたのか、荒瀬ダムをどう考えていたのか、荒瀬ダムの撤去をどう思うのか、荒瀬部落をどうしたいのか、を知りたいのである。

## 紹介：流域圏の本『出水の川と生活の歴史』出水市教育委員会 平成3年

球磨川漁協組合員 溝口隼平

アユはたくましいもので、仔魚の折海にいて、その年最も良い川の水の匂いを嗅ぎ分け遡上する。サケのように、必ず生まれた川というわけではないようだ。不知火海に注ぐ最も大きな川が球磨川だが、不知火海へはその他にも数多の川の水が注ぐ。仮にひとつの川が火山の噴火や、無慮な開発行為で壊滅的な状況になったとしても、近隣の川が健全であり続けられれば、一度壊れた川に環境が戻ればアユは戻ってくる。ひとつの川が健康になれば、隣の川の漁獲がよくなることもありうる。アユを追う目線からしたらば、不知火海に注ぐすべての川が健全であるかどうかを知りたいものだ。しかし、生活圏を離れ他所の土地の川を深く知るということは案外難しい。さらに各々の川での魚類の地方名、岩や瀬、漁法や川との付き合い方などの、土地ならではの共有知は河川開発の歴史が積み重なるのとは対極的に失われていくばかりである。一度失ってしまえば、たとえそれが故郷の川だとしても、川が環境が戻ってきたとしても、共有知として根付かせることは難しい。いつか再生された川が戻ってくるその時のためにも、川に対する共有知が残るうちに、せめてひとつの川に一冊ずつ、川の歴史と生活をする本があるといいと切に願う。私の古郷である出水市に、それを試みた本がある。その昔遊んでいた川の様子や、それよりさらに昔の出来事を知ることが出来るこの記録は流域の宝物である。



## 追悼：原田正純先生を偲んで

熊本学園大学社会福祉学部 丸山定巳

去る6月11日、原田正純さんが亡くなられた。これまで、いくつかの大病を克服されてきていたので今度もという思いもあったが、さすがに疲れてしまわれたのであろう。穏やかな最後だったようだ。

原田さんの活動は多岐に及んでいるが、まず医学的功績としては、なによりも胎児性水俣病患者の存在を実証されたことであろう。母親の胎盤は、胎児を守るために毒物は通さないとの医学界の定説を覆された。メチル水銀に限らず、次々に新しい化学物質が合成される現代社会への警鐘となった。

水俣病第一次訴訟原告支援のため、1969年9月に水俣病研究会がつけられた。メンバーは、支援者や研究者それにチツソの労働者などいろいろな分野から集まった。その場で、はじめて原田さんにお会いした。被害の実態の議論になるとまずは医学が焦点になる。原田さんは、門外漢のメンバーの問いかけにも丁寧に説明され多くを学ばせてもらった。そうしたなかで「水俣病の前に水俣病はなかった」それ故にこそ、水俣の現実から出発しなければならないのにそれが欠けていたとの医学への反省を時として口にされていた。

多くの裁判で、現行の水俣病認定基準の壁に立ち向かい、ひとり専門家として患者を支えてこられた尽力は並大抵ではなかった。水俣病患者への償いが未だに終わらず問題として続いていることへの無念を吐露されることも少なくなかった。患者に寄り添い時には患者から学び、現場から出発して真実を解明していく。けっして声高ではなく穏やかな姿勢の中でそれを貫き不条理を糺してこられた。そうした原田さんの存在は、放置されてきた水俣病患者にとってせめてもの救いであった。

その活動は、やがて水俣病だけに留まらず、三池の炭塵爆発被害やカネミ油症問題からさらにはベトナム・ブラジル・カナダなど海外の被害者の世界まで広がっていった。そこに共通して見られる差別・抑圧の構造に直面して、原田さんの言及も必然的に、社会的政治的分野まで及ばざるを得なかった。常々「医学が水俣病を独占してしまったことが患者には不幸であった」ともいっておられた。こうした経験・思いが、後の「水俣学」への提唱となったのではないかと思う。被害者・弱者の側に立って、現場を大事に当事者から学び、学問の独占や玄人素人の壁をつくらず道理を実現していく学問。原田さんが体現してこられたこの世界は、未だ緒に就いたばかりだった。「水俣学」を発展させていくことが、残されたわれわれにとっての大きな課題となっている。



↑在りし日の原田先生

※原田正純先生には、学会の設立当初から平成22年まで当会の副会長を務めていただきました。役員一同心から先生のご冥福をお祈りいたします。

### ★★★会員募集中です！★★★

市民と研究者が、様々な学問分野を“流域圏”という切り口でつなげ、地域のより深い理解につなげようとする、生まれたばかりの学会です。現在数十人の研究者及び市民の方が会員登録をしています。地域の知識を広く集め、研究者と市民をつなぐ学会活動に多くのご参加をお待ちしています。お仲間になって頂ける方がおられましたら、ご紹介ください。

連絡先（学会事務局）：熊本県熊本市南区城南町東阿高 1136-6（佐藤伸二方） 年会費（個人）3000円  
TEL/FAX：0964-26-2003 E-mail:tsuru-shoko89314@hiz.bbq.jp（つる方） （団体）10000円

振込先：（郵便局）口座記号番号 01720-5-63422 加入者 不知火海・球磨川流域圏学会  
（銀行）ゆうちょ銀行 179店（当座）063422 名義 不知火海・球磨川流域圏学会

# 八代海沿岸の地名①立神

崇城大学非常勤講師 佐藤 伸二

八代郡氷川町の集落名でもある。江戸時代の立神村にあたる。この集落の東側、氷川の右岸に垂直に立つ石灰岩の岩壁が立神で、集落名はこれにちなんだものと考えられている。

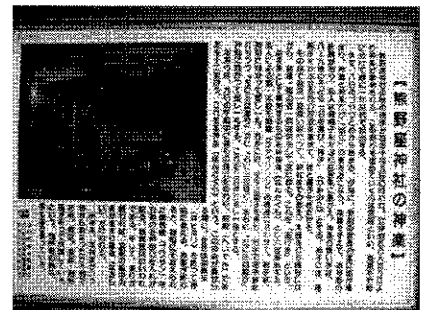
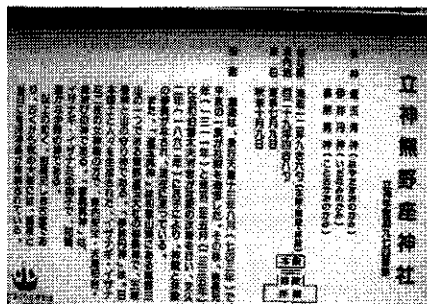
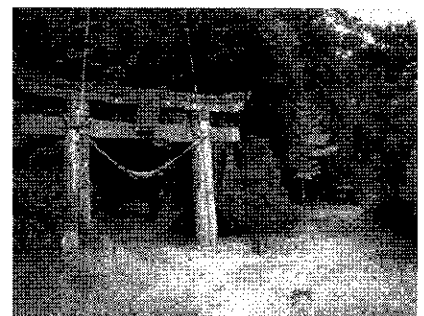
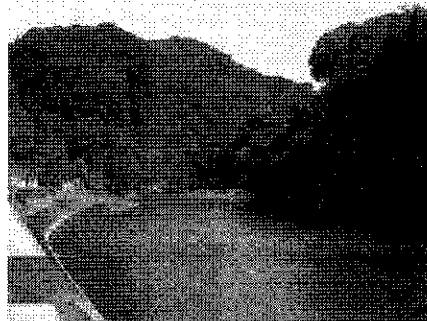
江戸時代後期の地誌『肥後国誌』の立神村を見ると、立神についておおよそ次のような記述がある。「白嶽」と書き、シラタケまたはシラタキと呼んでいる。高さ45間、横幅130間の白岩の壁で、直下は氷川の淵である。頂上に上官の小堂があり、中宮に不動明王、下宮に番神が祀られている。

戦国時代の『八代日記』によると天文10年(1541)4月2日、当時八代地域を支配していた相良長唯(義滋)が「立神御社」に参詣している。また、永禄4年(1561)5月20日には「立神上官ノ石」が落下した。「御祈念」したのでその年は何事もなかったと書かれている。古くからこの地域の重要な神として崇められていたのである。

「タケ」は高く険しい山を意味し、岳や嶽と書かれる。白嶽(シラタケ)は白い岩でできた高く険しい山で、その切り立った壁に靈威を感じ神として崇めたので立神であろう。

岩壁の白い線が瀑布に似ているのでシラタキと言うとの説もあるが、これは正しくないと思う。ちなみに古語では「滝(たき)」は早い瀬・急流・激流の意味で、壁を垂れ落ちる水は「垂水(たるみ)」である。

立神の由来について「岩壁の洞穴を竜穴または竜神と称し、竜神から立神と称されるようになった」との説がある。今のところ竜神と書いた資料が無いので、これにも賛同できない。この説は阿蘇神社の主神である健甕竜命(たけいわたつのみこと)からの連想で「立」を「竜」の変化と考えたのでであろう。「竜(たつ)」は大蛇のような体で角を持つ想像上の動物で、水に潜み空を飛んで雲を起し雨を呼ぶと考えられており、「りゅう」とも呼ばれる。各地にある竜神は「りゅうじん」と呼ばれることが多く、「たつがみ」とは普通呼ばれない。



# 不知火海・球磨川流域圏学会 学会誌 原稿募集！（随時）

—みなさんの、地域への熱い想い、愛着を学会誌に載せてみませんか—

学会では、会則に定められた学会誌を発行するため、下記の要領で原稿を募集いたします。

専門家に限らず一般市民の方や農林水産業に従事されている方々、行政の方々から、学際的な情報を広く掲載し、紹介していきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

## 1. 原稿の種類

募集する原稿は、以下の4種類です。

### 1) 原著論文

広くみなさんから、論文を募集します。流域圏に少しでも関係するものであれば、どのような研究領域の論文でも構いません。ご投稿いただいた原稿は、専門家や地域の事情に詳しい方に査読を依頼し、編集委員会で採否を決定いたします。なお、本学会誌は高校生でも読めるものを目指していますので、専門用語には必ずわかりやすい解説をつけてください。

### 2) 研究ノート、調査資料、記録

愛する地元＝流域圏に関して、資料を集めている方はいませんか？積み重ねた知識を文章に残しませんか？論文の形には至らなくても、あなたの探究心は流域のみなさんにとっても価値あることに違いありません。たとえば、自然・歴史・社会などの調査報告、観察記録、資料として未来に残したい情報などです。活発な探究心と知識の共有は、流域の未来の礎となることでしょう！小中学生、高校生からのクラブ活動や自由研究の紹介も大歓迎です。

### 3) 流域いろいろ

研究に限らず、流域への想い・エッセイ、イベント情報など、流域のみなさんに知ってほしいこと・お伝えしたいことはこちらにどうぞ。有形 無形の流域の宝物を探し出し、みなさんと分かち合いましょ！「こんな研究して欲しいなあ～」という要望なども是非お寄せください。

### 4) コラム欄

分量は1ページから半ページの間（800～1600字）で、自己紹介、エッセイその他をお寄せください。図表写真は1枚だけ掲載可能です。ニュースレターに掲載するには字数が多すぎる、ニュースレターにすでに載ったが書き直して学会誌にも載せたい、というようなご希望も歓迎いたします。タイトル、著者名を明記してください。原稿の採否は編集委員会が決定します。

2. 発行予定 毎年4月末日。諸事情により変更される可能性があります。

3. 締切り 例年11月ごろ（変更される場合がありますので、お問い合わせください）

## 4. 投稿方法

投稿を希望される方は、まず編集委員長に電話やメールでご相談ください。

原稿の形式は、学会誌創刊号に準じますが、引用文献の記載法など、細かい点については、追ってお知らせいたします。完成した原稿は、投稿整理票に必要事項を記入の上、原稿とともにメールまたは郵送で編集委員長宛にお送りください。手書き原稿も歓迎します。

## 5. 送り先、問い合わせ先

編集委員長 高木正博 〒889-1702 宮崎市田野町乙 11300 宮崎大学農学部附属田野フィールド（演習林） tel: 0985-86-0036, fax: 0985-86-2551, e-mail: mtakagi@cc.miyazaki-u.ac.jp

不知火海・球磨川流域圏学会は、私たちでつくる、私たちのための学会です。皆さんからの熱い想いが投稿されることを、編集委員会委員一同、お待ちしております！（編集委員会）

## —学会誌への広告募集中—

企業・商店・個人・サークルなど、分野を問いません。10cm×7cm（A4の1/8サイズ）5000円、（A4全面4万円）応募先は上記学会誌原稿の問合せ先まで。※公序良俗を乱し、学会誌の相応しくないと判断された場合はお断りする場合があります。

# 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売

## 最新号 vol.6 (2012年) 1,000円

【研究ノート】宮崎の海岸林と砂丘と砂浜／八代の干潟の底生動物の特性について／ボート上からアマモ苗、栄養株を移植するための植栽機の開発

【流域いろいろ】八代海での「干潟生物の市民調査」研修会の実施と干潟調査ができる人材づくり／写真でつづる昭和の八代―麦島勝写真集より―／地域資源を活かした五木型ツーリズムの展望

【記録】荒瀬ダムに関する資料分析／日本初のダム撤去の現場からの大報告 荒瀬ダムのこの1年

【平成23年度研究発表会記録】八代地方の干拓の歩み概観

【学会記録】会則・役員名簿・活動記録・入会申し込み方法・内規等

## vol.5 (2011年) 800円

【総説】海藻中の機能性成分とその有効利用

【原著論文】球磨川流量と八代海北部の鉛直循環流量の関係

【記録】日本発のダム撤去の現場からの報告―荒瀬ダムのこの1年

【平成21年度研究発表会記録】基調講演：五木村での取材を通じて／九折瀬洞窟の調査報告／森林の社会的価値の変化を踏まえた人工林の未来可能性／新発見「五木村庄屋元文書」の価値

【その他】ニューズレター創刊号、学会会則、役員名簿、入会案内等

## vol.2 (2008年) 800円

【講演記録】水俣学が目指すもの

【原著論文】アジア氾濫原沖積平野の地下水保全対策を考える／人吉盆地に設計されたランドスケープと住民意識の関連分析／南九州のダム撤去事例の公開と共有について～国内におけるダム撤去データベースの作成過程より／沿岸環境の再生に向けたマコンブ・ワカメの養殖とその成長及び収穫量

【調査資料】八代海東沿岸におけるアマモの分布

【記録】地域通過「ストーン」について／山村の暮らしと森の公益機能／水俣病と地域社会

【流域いろいろ】天草下浦石工の足跡を探る／球磨川に古代ロマン発見／コロラド州・Durango／八代ばんぺいゆエコクラブ／次世代のためにがんばる会／為朝伝説と水俣。

## vol.3 (2009年) 800円

【巻頭講演記録】世界遺産を目指す三角西港

【原著論文】giSight を利用したホテル飛翔個体数データ公開システムについて

【研究ノート】水俣久木野を中心とした地域情報共有システムの構築／天草・下浦石工が制作した金剛力士像について

【調査資料】竹林の管理放棄と分布拡大について

【流域いろいろ】書評『川と海流域圏の科学』／WTO決裂、熱烈歓迎／水俣からの報告

## vol.4 (2010年) 500円

【巻頭講演記録】国宝に指定された青井阿蘇神社

【研究報告】人吉におけるダムの疑義～市民によるダム反対運動が始まるまで

【研究ノート】荒瀬ダム撤去と水俣病の共通点―流域圏再生の視座から―

【調査資料】熊本県南部の湧水に見られるオキチモズク

【流域いろいろ】焼酎よもやま話／親鸞聖人木像と隠れ念仏

## ■創刊号 vol.1 について…CD販売のみです (800円)

【巻頭言】不知火海・球磨川流域圏学会誌の発刊に際し

大和田紘一

【原著論文】自然と共生する流域圏・都市再生に関する2.3の考察

吉川勝秀

GPS搭載漂流ブイを複数同時追跡可能な不知火海の潮流観測システムの開発

入江博樹・上久保祐祐志・三田長久

土砂災害対策としての「警戒・避難」の現状と課題

小川 滋

【研究ノート】水俣における防災情報システム構築の現状

森山聡之

【調査資料】球磨川のチスジノリ

村上哲夫・加藤由紀子・程木義邦・大和田紘一

【記録】流域圏構想の新たな展開

吉川勝秀

森林の保水力について

蔵治光一郎

【流域いろいろ】ボランティア活動の要諦

瀬戸口忠臣

沿岸環境再生を願う地域の活動～海藻の森づくり～

森下惟一

“ないものねだり”から“あるもの探し”への地元学

大塚勝海

天草下浦石工の足跡を探る(1)

佐藤伸二・時松雅史

■申込み方法：下記宛に必要な部数、お名前、ご住所、送り先をお知らせ下さい。

E-mail: crane938@yahoo.co.jp, 電話/FAX: 0965-32-7140 (総務: つる 詳子)

※10冊以上は、割引サービスがあります。

■お願い: 図書館や公民館など学会誌を購入して下さるところをご紹介下さい。

## 2012年度 第2回現地見学会 水俣川流域の自然と文化財

■日時：平成24年10月21日（日）

■集合場所：新水俣駅前

■集合時間：午前9時30分

■予定：09:40 新水俣駅発→09:50 水俣城跡見学→  
10:20 宝川内集落見学 →11:30 寒川水源見学  
→昼食・交流久木野ふるさとセンター（愛林館）  
→寒川の棚田→15:00 水俣駅解散

■参加費：2000円（昼食・移動車両分乗代）

■申し込み先：つる詳子 電話/FAX：0965-32-7140、  
E-mail:tsuru-shoko89314@hiz.bbiq.jp

⇒申込み締切：10月15日まで、  
上記宛メールもしくは電話でお申込み下さい。

現地見学会ご案内  
10月21日（日）

※詳しくは同封  
のチラシをご参  
照下さい

### 花火大会（全国花火競技大会）のお誘い（現地見学会の前日）

■日時：平成24年10月20日（土）

■持参するもの：お弁当、飲み物は持ち込み（現場で買うこともできますが、お値段は高め、並ぶことも  
あります。敷物はこちらで準備します。

■集合時間：17時30分（花火は18:30開始）

■集合場所：現地（萩原橋の上流側200m程）人で混雑していますので、わからない場合は電話を下さい。

■参加申込み：場所取りの関係がありますので、事前に坂井まで連絡下さい。

■参加費：500円（軽なおつまみ程度準備しておきます）

■注意・夜冷えることがありますので、対策をお考え下さい。

・宿泊は雑魚寝でいいなら、つる詳子宅が利用可能です。

・ゴミはお持ち帰り下さい。

■駐車場等：日奈久の臨時駐車場からのシャトルバス利用になりますので、事前に八代市HPで  
ご確認下さい。⇒やつしろ市第25回全国花火競技大会 HP：<http://hanabi.gorotto.com/>

### —学会誌への広告募集中—

企業・商店・個人・サークルなど、分野を問いません。10cm×7cm（A4の1/8サイズ）5000円、（A4全面4万円）  
応募先は上記学会誌原稿の問合せ先まで。※公序良俗を乱し、学会誌の相応しくないと判断された場合はお断りする場合があります。

■不知火海・球磨川流域圏学会ニューズレター 第13号

編集：発行/不知火海・球磨川流域圏学会